

若年女性における子宮頸がん検診受診行動の促進 ふじのくに地域・大学コンソーシアムを通して実施した地域と 学部ゼミナールの共同事業

大石 ふみ子¹⁾ 氏原 恵子¹⁾ 鈴木 花²⁾ 林 優香³⁾

1) 聖隷クリストファー大学看護学部

2) 神奈川県立がんセンター

3) 聖隷浜松病院

Promotion of Cervical Cancer Screening Examinations for Young Women *Joint Project of the Local Area and an Undergraduate Seminar Organized by the Fujinokuni Regional and University Consortium*

Fumiko Oishi¹⁾ Keiko Ujihara¹⁾ Hana Suzuki²⁾ Yuka Hayashi³⁾

1) School of Nursing, Seirei Christopher University

2) Kanagawa Cancer Center

3) Seirei Hamamatsu General Hospital

《抄録》

2018年度の「公益社団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアム・ゼミ学生等地域貢献推進事業」における沼津市との共同事業に「がん看護ゼミナール」として参加し、若年女性の子宮頸がん検診・受診行動を促進する教材作成に取り組んだ。文献検討とターゲット年齢のゼミ生による討議、静岡県内市町が用いている検診関連資料（Web版および紙媒体）の検討、検診現場見学を実施し、教材に必要な内容や望ましい伝え方と、現状の比較を行った。その結果、現在用いられている資料には検診を動機づける内容が不足していること、検診への抵抗感を軽減する工夫や、多量の文字情報に抵抗感を抱く若年者への対応が必要であることが明らかになった。得られた結果に基づいて作成する教材の内容を整理し、イラストレーターとの協力のもと、子宮頸がん検診の必要性を伝え、受診を促し、情報提供により不安を和らげることを目指した啓発用パンフレット作成に至った。

《キーワード》

子宮頸がん検診、若年女性、検診受診行動促進、健康教育、啓発用パンフレット

I. はじめに

子宮頸がんはヒトパピローマウイルス (HPV) 感染が原因で発症することが明らかになっており、20～30代の患者が多い(飯原, 2007)。子宮頸がんは、がんになる前に細胞診検査で異常を見つけることができるため、細胞診を行う検診を受けることにより死亡率が減少する。しかし、子宮頸がん検診は、膣内の組織を採取する手続きにおいて羞恥心を伴う検査であり、検診による発見が重要となる若年層における受診率は高くない。沼津市においては、20歳から子宮頸がん検診が受けられるシステムが整えられているにもかかわらず、平成28年度の実受診率は6.6%と非常に低い(沼津市ホームページ, 沼津市健康診査のご案内より)。

そのため、沼津市では2018年度の「公益社団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアム」の「ゼミ学生等地域貢献推進事業」に、県内大学ゼミに調査研究を希望する地域課題として『大学生と創る 若者に子宮頸がん検診を受けてもらうための効果的な方策についての研究』というテーマを提出した。沼津市の意図は、若者目線で子宮頸がん検診を受けたいとする媒体を作成することであり、この課題に関心を抱いた我々は、検診を促進する媒体を作成することを最終的に目指すこととして、共同研究者となることを申し込み、採択された。沼津市と共有した研究目的は、若年層の子宮頸がん検診受診率の低さをもたらしている要因と、受診行動を促す要因を検討し、沼津市の特性を踏まえた効果的な検診促進の方策を明らかにするである。

II. 研究の構造

本研究は、沼津市と共同で行う学生のゼミナールで取り組む事業の一環であることから、以下の内容で実施することとした。

第1段階：文献検討により、子宮頸がん検診についての日本の若年女性の意識を明らかにする。

第2段階：20代女性であるゼミ生のグループディスカッションにより、子宮頸がん検診への受診行動促進方法を検討する。

第3段階：静岡県内の市町の子宮頸がん検診に対する取り組み、受診率、それらに影響を及ぼしている関連因子をインターネット、各自自治体発行物より明らかにする。

第4段階：沼津市の検診状況の視察(沼津市・健康づくり課・検診予防係との調整により)を行う。

以上の4段階から得られた結果を考察し、その内容に基づいて、沼津市の若年女性の子宮頸がん検診促進のための啓発用パンフレットを作成する。

III. 第1段階 研究1

先行研究による子宮頸がん検診に関する日本の若年女性の意識の検討

1. 目的

先行研究の検討により、若年層の子宮頸がん検診受診率の低さをもたらしている要因を明らかにする。

2. 方法

医学中央雑誌 (WEB版, 2018年5月) にて、キーワード ((子宮頸部腫瘍 /TH or 子宮頸がん /AL)) and ((集団検診 /TH or 検診 /AL)) and (若年女性 /AL) により検索を行い、31件の文献を得た。これらについて、題目と抄録内容から目的に適合した文献を抽出した。文献の内容から若年女性が子宮頸がん検診を受診しない理由について言及している部分を抜き出し、意味の類似性でカテゴリ化した。

3. 結果

目的に適合した文献は、井上ら（2015）、井上ら（2013）、岩崎ら（2013）、長谷川ら（2015）、助川ら（2016）、松本ら（2015）による6文献である。6文献の検討から抽出・分類された「若年女性が子宮頸がん検診を受診しない理由」を表1に示す。

6文献の検討から、若年女性の子宮頸がん検診受診率の低さをもたらす6つの要因が明らかになった。これらは①自分にとって子宮頸がん検診は関係が無いものである、②検診受診に伴う羞恥心がある、③受診方法が分からない、④面倒に感じている、⑤自分にとって負担である、⑥検査内容への不安、恐怖であった。

IV. 第2段階 研究2

若年女性に対する子宮頸がん検診受診促進方法の検討

1. 目的

研究1で明らかになった要因について、本研究における子宮頸がん検診受診促進の対象年齢である学生同士でディスカッションを行い、若年女性の子宮頸がん検診受診率を上げるための方法を検討する。

2. 対象

がん看護に関連した看護研究を行っている看護学部の4年生5名

3. 方法

1) データ収集方法

(1) 参加者全員で、研究1で得られた「若年女性が子宮頸がん検診を受診しない理由」を共有した。

(2) 本課題に中心的に取り組んでいる学生が進行役となり、A若年女性が子宮頸がん検診を受診しない理由、B若年女性の子宮頸が

ん検診を促進する方策、について意見を出し合い、話し合った。

(3) 話し合いの内容は、書記役がメモを取り、できるだけ早く書き起こした。

2) 分析方法

(1) 話し合いの内容から、A若年女性が子宮頸がん検診を受診しない理由、B若年女性の子宮頸がん検診を促進する方策、に関する内容を抜き出した。

(2) A若年女性が子宮頸がん検診を受診しない理由、については、研究1の内容と見合わせ、新たな内容があれば研究1の結果に追加・修正した。

(3) B若年女性の子宮頸がん検診を促進する方策、については提案内容に関する部分を抜き出し、類似性と関係性で分類した。

3) 倫理的配慮

参加学生は、全員ががん看護ゼミナールを選択し、本課題に取り組むメンバーであり、対象者であるとともに研究者として、内容を十分理解して参加した。最初に自身のプライベートなことは話したくない場合は話さなくてよいことを確認し合った。

4) 結果

看護学科4年生で、がん看護ゼミナールを取得した4名の学生が参加した。都合がつかなかった1名は、書面で意見を提出した。

ディスカッションは約80分で、研究1の結果をもとに、それぞれが自らの体験や考えを自由に話す形で実施した。

ディスカッション内容の分析の結果、Aについては、文献の内容と異なる子宮頸がん検診を受診しない理由は得られなかった。

Bについては、若年女性の子宮頸がん検診を促進する方策として、①提示すべき情報、②提示場所、③提示方法、④工夫点、が得られた。

①提示すべき情報として挙げられたのは、子宮頸がんそのものや、受診の詳細のほか、検診を受けるメリットや体験者の声、検診を

表 1. 6文献の分析より得られた若年女性が子宮頸がん検診を受診しない理由

カテゴリ	理由内容
①自分にとって子宮頸がん検診は関係が無いものである	<ul style="list-style-type: none"> ・気になる自覚症状がない ・歳をとってから受ければよいと思う ・自分は健康である ・がん好発年齢でないためがん罹患を身近な問題として考えられない ・年齢的にまだ若い ・自分には関係ない ・症状がない ・周りで受けた友人がいない ・若いから病気になるとは思わない ・子宮頸がんは 30 歳以上の女性の病気である ・検診の意義が見いだせない ・若いからまだ必要ない ・子宮頸がんを知らない
②検診受診に伴う羞恥心がある	<ul style="list-style-type: none"> ・医者が男性 ・検査を受けるのが恥ずかしい ・産婦人科に行くことに抵抗がある ・内診台にあがり、性器を見られるのは恥ずかしい
③受診方法が分からない	<ul style="list-style-type: none"> ・どこにいけばいいのか分からない ・子宮頸がん検診についてよく知らない ・受診方法が分からない ・子宮頸がんや検診に関する情報が入ってこない
④面倒に感じている	<ul style="list-style-type: none"> ・検査を受けるのが面倒 ・時間がない ・面倒である ・検診の受け入れ期間や申込期間の制限 ・偶数年齢または奇数年齢に限定した実施
⑤自分にとって負担である	<ul style="list-style-type: none"> ・検査を受けられる医療機関が自宅近くにない ・健康にお金をかける余裕がない ・時間がかかる
⑥検査内容への不安、恐怖	<ul style="list-style-type: none"> ・検査方法を知らない ・検診は痛そう ・検査が怖い

行う医療者の声などであった。

②提示場所については、学校や成人式など対象者グループが多く集まる場所でのほか、インターネットや広報誌など多くの人に触れる場が提案された。

③提示方法としては、書面と学校の授業の場、そしてテレビやインターネットなどが挙げられた。

④工夫点として、会場での託児所設置など受診しやすい工夫と、受診したことによる特典提供などがあげられた。

V. 第3段階 研究3

静岡県各市町で実施されている子宮頸がん検診促進のための方策の検討

1. 目的

静岡県内の各市町の、子宮頸がん検診の広報状況を明らかにする。

2. 対象

- 1) 静岡県内の35の各市町のWebサイト
- 2) 静岡県内の35の各市町が実際に用いている印刷物、配布資料

3. 調査方法

1) インターネット上で静岡県内の全市町のWebサイトから子宮頸がん検診についての情報を入手し、以下について内容を抽出した。

- ①検診の案内方法
- ②無料クーポンなどサービスの有無
- ③受診可能な日程
- ④検診場所
- ⑤検診費用
- ⑥検診・子宮頸がんについての説明の有無

2) 静岡県内の35の各市町に対し、返信用封筒をもって各自自治体の検診事業で用いている「各家庭への紙媒体による検診の広報・案内

状」の提供を依頼した。提供された資料から、インターネット上の資料と同様に内容を抽出した。さらに、⑥についてはその内容について分類整理を行った。

4. 分析方法

得られた各市町の資料を熟読し、Web資料、紙資料別に調査項目について、内容を抽出し、一覧表にまとめ、内容を検討した。

5. 結果

インターネット上のWeb資料は35市町、紙媒体での資料は31市町の情報が得られた。

市町のインターネット上のWebサイトにおいては、検診を受診するための日時や場所、無料クーポンや費用についての情報が充実していた。しかしその一方で項目⑥検診内容や子宮頸がんについての説明があったのは18市町にとどまり、子宮頸がんや、検診の意義や意味を説明して受診を促進する内容については少ないことが示された。

紙媒体資料においては、Web上の資料よりも、項目⑥の子宮頸がんそのものや検診の意義や方法についての情報が充実していた。しかし内容についてはばらつきがあり、子宮頸がんの原因について説明していたのは13市町、性交渉体験がない女性は受診が不要であることの説明があったのは3市町、好発年齢が示されていたのは13市町、子宮頸がんの症状が述べられていたのは10市町であった。子宮頸がん検診における検査方法が説明されていたのは28市町であったが、内容は内診や細胞診という言葉があるにとどまり、その詳細についての説明はほとんどなかった。検診・早期発見の意義については、24市町において説明されていた。詳細については表2に記す。

表 2. 子宮頸がん検診についての広報誌媒体に含まれている情報と実際の受診率：静岡県内31市町より

市町村名	子宮頸がんの原因	受診不要条件の説明	好発年齢	子宮頸がんの症状	検査の方法	検診・早期発見の意義	検診日程・受診方法	検診受診率(%)*
吉田町	○	×	×	×	○	○	○	94
小山町	×	×	○	×	○	○	○	89.3
菊川市	×	×	×	×	○	×	○	85.9
御前崎市	×	×	×	×	○	×	×	85.5
藤枝市	○	×	×	×	○	○	○	81.4
東伊豆町	×	×	×	○	○	○	○	80.2
長泉町	×	×	○	×	○	○	○	79.1
袋井市	○	○	○	×	○	○	○	77
裾野市	×	×	×	×	×	○	○	74.9
御殿場市	○	×	×	×	×	○	○	74.7
清水町	×	×	×	×	○	△	○	72.1
森町	×	×	○	×	○	○	○	70.5
掛川市	○	×	△	×	○	○	○	69.9
松崎町	○	×	○	○	○	○	○	68.6
三島市	×	×	×	○	○	△	○	65.3
河津町	○	○	○	○	○	○	○	64.6
島田市	○	×	○	○	○	○	○	63.3
南伊豆町	×	×	×	×	×	×	○	63.2
牧之原市	×	×	×	×	○	○	○	62.8
焼津市	○	○	×	○	○	×	○	61.4
湖西市	×	×	×	×	○	×	○	61.2
西伊豆町	×	×	○	×	○	○	○	58
沼津市	○	×	○	○	○	○	○	56
静岡市	×	×	○	×	○	○	○	52.6
函南町	×	×	×	×	○	○	○	51.5
磐田市	×	×	×	○	○	○	○	50.2
浜松市	×	×	×	×	○	×	○	48.9
富士市	○	×	×	×	○	○	○	48.7
下田市	○	×	○	○	○	○	○	41.8
富士宮市	○	×	○	○	○	○	○	39
熱海市	×	×	×	×	○	○	○	31.3
合計	13	3	12.5	10	28	24	30	

* 検診受診率については、厚生労働省「平成 27 年度地域保健・健康増進事業報告」、総務省「国勢調査報告」(平成 27 年 10 月 1 日)を用いた子宮頸がん検診受診率(「推計対象者数」によるがん検診受診率の試算)を用いた。

<http://www.pref.shizuoka.jp/kousei/ko-420a/cancer/kensin/documents/27sikyukeiganpdf.pdf> (2019/12/25)

VI. 第4段階 検診見学

沼津市における子宮頸がん検診の見学

1. 目的

実際の現場で行われている子宮頸がん検診を学生視点で見学し、対象者に働きかけるポイントを検討する。

2. 方法

1) 日時 2018年9月29日（土曜日）

2) 場所と内容

沼津市保健センターの保健師と調整し、行われている状況、施設を見学する。

3. 結果

2名の学生と1名の教員が見学に参加した。当日は沼津市役所と近接の検診センターにおける子宮頸がん検診および乳がん検診の実施日であり、子宮頸がん検診は、検診車で行われていた。見学は、検診受診者のプライバシーに配慮し、直接受診者に接することはせず、環境の観察、設備の体験を中心に行った。

検診車の入り口には優しいピンク色の重いカーテンが2重にかかっており、他者と顔を合わせにくい工夫がされていた。また、受け付け時の番号で呼ぶなど検診者のプライバシーに配慮した検診であった。

見学後の検討において、実際に内診台に座って感じたこととして、カーテンで検診を実施する医師の顔が見えないことで羞恥心の軽減に繋がる反面、初めての検診の方にとって、不安の増強に繋がってしまうのではないかという意見があった。

会場には託児所が併設されており、子供と一緒に検診にすることができ工夫がなされていた。その一方で会場全体は薄暗く、若年女性をターゲットにしているという印象は薄いという意見があった。

VII. 考察

1. 若年女性の子宮頸がん検診を促進する方策

若年女性が、子宮頸がん検診を受診しない第1の理由は、自分には関係ない、という思いであった。これは子宮頸がんについての知識がないことと、自分は若く健康であるという若年女性の認識に基づくもので、子宮頸がんへの罹患など全く現実味がなく、検診に対する意義も意味も感じられない状況である。このような無関心の背景には、子宮頸がんの初期においては気になる自覚症状がないことが寄与していると考えられる。井上ら(2015)の未婚・未産の20歳代女性を対象とした調査では、若年女性が子宮頸がんは自分には関係のない病気ととらえる要因には、子宮頸がんや検診受診に関する情報の不足があり、自覚症状がない中での受診行動は情報収集を主体的に行うことへの面倒さを生み、検診受診の意欲は潜在化されたと報告している。さらに、2013年の井上らの女子大学生を対象とした調査でも、9割の対象者から気になる症状がないことが子宮頸がん検診を受診しない理由としてあげられており、自覚症状のなさに関連した当事者意識の薄さが、子宮頸がん検診の受診行動を妨げている重要な要因であると考えられる。

2つ目は、検診そのものがもたらす高い障壁である。子宮という部位の検査に伴う羞恥心や不安・恐怖感、分りにくい初めての受診方法、面倒さや負担感が、検査に赴くことから若年女性を遠ざけていたと考えられる。男性医師や検査に対する羞恥心、産婦人科受診への抵抗感が、受診行動を妨げていることは先行研究でも指摘されている（井上ら、2013）。また岩崎ら（2013）は、若い世代では、産婦人科受診を妊娠と勘違いされることへの抵抗感や顔見知り同士の接触への不安、妊婦と一緒にいる違和感など、産婦人科受診に対

する根強い抵抗感があると報告しており、子宮頸がんという病気の特徴に基づく検診への抵抗感に注目する必要性が示唆された。

一方、身近な人からの検診受診の働きかけは情緒的支援となり、検診受診の意思決定を後押しすること（井上ら、2015）や、みんなで声を掛けあいみんなが受けるから自分も受ける、といった連帯意識は検診行動を高める要因（岩崎ら、2013）であることが指摘されている。若年女性の子宮頸がん検診受診行動は、医療者や周囲の人などの他者に影響を受けており、これら他者からの働きかけが、子宮頸がん検診に対する心理的障壁をやわらげる可能性が示された。

以上の先行文献の分析をふまえた、20代女性看護学生のグループディスカッションで、受診行動促進のために提示すべき情報として具体的に提案されたのは、場所や時間といった実際の受診に関わる詳細な情報提供も必要ではあるが、子宮頸がんそのものに関する情報、検診を受けるメリットや体験者の声、検診を行う医療者の声を伝えることが重要ではないか、ということであった。

子宮頸がんそのものや検診を受けるメリットについての情報を伝えることは、子宮頸がんという病気と検診の意義についての理解を促すことである。このような情報提供により、子宮頸がん、子宮頸がん検診を「自分のこと・大切なこと」と感じてもらうことができれば、受診行動を大きく動機づけることができると考えられる。さらに、検診の体験者や医療者からの前向きなメッセージは、未知の子宮頸がん検診への漠然とした不安を和らげ、抵抗感を減らし、安心感を与える効果があると考えられる。以上より、子宮頸がん検診を受診しない若年女性の受診行動を促進する働きかけとして、①「自分のこと・大切なこと」ととらえてもらうための、子宮頸がん検診に関する情報提供による理解の促し、②安心感を与える体験者や医療者による検診受診の促

し、が重要であることが明らかになった。

今回、我々は沼津市の協力を得て、子宮頸がん検診の見学を行った。その中で、初めて見学する検診の現場は、非医療従事者の若年女性には未知の場であり、見知らぬ医師によって羞恥心を伴う検査を受けることは大きな抵抗感をもたらすものであることを感じた。そこで、上記の①②に加えて、③未知の検診がもたらす脅威をやわらげ、抵抗感を減らすための一般的疑問への説明や検診に関する具体的内容説明、を受診行動促進の方策として加えることとした。

以上3つの働きかけのうち、①は、若年女性が子宮頸がんを身近な自分の問題としてとらえ、検診の意義を理解し、「自分は検診を受けるべきだ」「子宮頸がん検診を受けたい」と感じるきっかけとなると考える。②と③の働きかけは、子宮頸がん検診への不安をやわらげ、安心感を与えて、受診行動を後押しすることが期待される。

2. 静岡県における子宮頸がん検診促進の方策の実際

静岡県全市町の Web サイト、紙媒体資料での子宮頸がん検診についての情報提供状況の分析から明らかになったのは、最も手厚く情報提供されていたのは、検診の場所や日時という「受診できるようにする」ための情報である、ということである。これらの情報は、提供される必要がある情報であるが、「受診したい」「受診しなくては」と感じさせ、受診を促す内容としては不十分であると考えられる。また、これらは、文献検討、若年女性によるディスカッション、検診見学から重要性が明らかになった、①「自分のこと・大切なこと」ととらえてもらうための子宮頸がん検診に関する情報提供による理解の促し、②安心感を与える体験者や医療者のメッセージ、③未知の検診がもたらす脅威をやわらげ、抵抗感を減らすための一般的疑問への説明や

検診に関する具体的内容説明、とは合致しない。
を工夫することが重要である。

検診の場所や日時に情報が偏る傾向は、紙媒体の資料よりも、Web上のほうが強かった。これは、検索が容易な市町のWebサイトでは実際の情報が求められること、じっくり読んでほしい資料には個人の自宅に郵送される冊子やパンフレットの形態がふさわしいとして選ばれたためと考えられる。市町によっては子宮頸がんや検診についての充実したパンフレットを個人に送付しており、今回の共同事業者である沼津市も紙媒体資料において検診を「自分のこと・大切なこと」ととらえてもらうための情報提供を実施していた。しかし表2に示したように、このように重要情報を網羅していることは、必ずしも高い受診率にはつながっていない。多量の充実した情報提供が効果を上げていないのは、今日の若者がスマートフォンなどで一瞬で情報を獲得する習慣を身につけており、多量の文字情報は避けてしまう傾向があることも関係していると考えられる。

考察1および2より、以下のことが明らかになった。

現在の静岡県の子宮頸がん検診に関する情報提供においては、受診方法に関する情報に偏っており、子宮頸がんと子宮頸がん検診を「自分のこと・大切なこと」ととらえてもらうために必要な情報が不足しているため、これを充実させるべきである。

はじめて子宮頸がん検診を受ける心情に配慮して、安心感を与える体験者や医療者による検診受診の促しや、未知の検診がもたらす脅威をやわらげ、抵抗感を減らすための一般的疑問への説明や検診に関する具体的内容説明を行っていく必要がある。

情報の提供においては、時間を掛けてじっくり読んでもらうことを期待・要求するのではなく、読み手を惹きつける工夫を凝らし、短時間あるいは一目で理解できるような方法

Ⅷ. 結果と考察に基づく啓発用パンフレット作成

考察を踏まえ、若年女性に子宮頸がん検診の意義を伝え、検診受診行動を促進するための資料内容の検討を行った。

1. 若年女性の子宮頸がん検診促進のための啓発用パンフレット作成

1) パンフレット内容

若年女性の子宮頸がん検診への受診行動を促進するために必要な内容を以下のように整理した。

(1) 子宮頸がん検診を動機づける

①子宮頸がんの理解を促進する

- ・子宮頸がんの疫学と発症原因
- ・子宮頸がんの影響
- ・子宮頸がんの予防と早期発見の重要性

②子宮頸がん検診の理解を促進する

- ・子宮頸がん頸がん検診の意義
- ・子宮頸がん検診の方法、内容
- ・子宮頸がん検診の費用

③子宮頸がん検診への抵抗感を減らす

- ・子宮頸がん検診体験者の言葉
- ・子宮頸がん検診を勧める医療者の言葉

(2) 子宮頸がん検診の受診方法を伝える

①連絡先掲載

②受診方法の記載

2) パンフレットの形態

共同事業者である沼津市の希望は、若者目線での意見、資料作成であったため、若者が面倒がらずに目を通し、行動変容を促す形態を工夫する必要があると考えた。そのためパンフレット作成に当たっては、

- ・正確な内容である
- ・面白く、興味深い内容である
- ・なるべく文字数は少なく、一瞬で読める
- ・色やデザインがおしゃれでかわいい

ことを重視した。

試作を繰り返す中で、イラスト、マンガ形式、Q & A 方式を取り入れることになり、専門のイラストレーターを依頼し、内容をどの様に落とし込んでいくかの検討を重ねた。

さらに、作成のプロセスにおいては、沼津市健康管理課、検診の啓発事業を行っている浜松市内がん患者会会員らによる内容チェックを受けた。

最終的に作成したパンフレットを図1に示す。

Ⅸ. おわりに

今回、学部学生の看護ゼミナールⅡとして、「公益社団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアム」の「ゼミ学生等地域貢献推進事業」に県内大学ゼミに調査研究を希望する地域課題として沼津市が提出した、『大学生と創る 若者に子宮頸がん検診を受けてもらうための効果的な方策についての研究』に取り組んだ。一つの自治体が問題意識を持ち、共有を呼びかけたテーマについて、様々な方向から検討して調査を行うということは、大いに貴重な機会であったが、さらに調査結果に基づいて論理的に解決策を考え、最終的に専門のイラストレーターに依頼してパンフレットの作成にまで至ることができた。作成した啓発用パンフレットについては、沼津市のみならず、県内外の複数の市町から使用したいという申し出を頂き、ファイルの提供を行っている。卒業ゼミナールの成果が検診事業に活用されるという体験をすることができ、大きな学びと学習意欲につながった。

謝辞

本研究の調査にご協力いただいた沼津市健康管理課沼津市保健センターの保健師の皆様、資料をご提供くださった静岡県内市町の検診

担当者の皆様に心より感謝申し上げます。本研究は2018年度の「公益社団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアム」の「ゼミ学生等地域貢献推進事業」の助成を受けたものである。

文献

- 長谷川文子、北川真理子 (2015) : 女子大学生の子宮頸がん検診に対する認識と行動の関連, 思春期学, 33 (1), 172-185.
- 飯原久仁子 (2007) : ヒトパピローマウイルスと子宮頸癌 -HPV の分子病理からワクチンまで-, モダンメディア, 53(5), 115-121.
- 井上福江、原理恵、濱田維子 (2015) : 未婚で未産の20歳代女性が子宮頸がん検診を受診するまでのプロセス, 母性衛生, 56 (2), 301-310.
- 井上福江、濱田雅子、田中佳代 (2013) : 文系大学の女子学生における子宮頸がん検診に対する行動採択影響因子, 母性衛生, 54 (1), 200-209.
- 岩崎和代、齋藤益子、木村好秀 (2013) : 子宮頸がん検診率に影響を与える女性の意識, 女性心身医学, 18 (2), 225-233.
- 松本真悟、中山明子 (2015) : 外来における疾患知識の啓発, 検診の勧奨が望ましい, Hospitalist, 3 (2), 349-355.
- 助川明子、大重賢治、坂梨薫 他 (2016) : 若年女性の子宮頸がん予防の知識と態度の変化-2011年から2014年までの経年調査, 思春期学, 34 (3), 324-334.

子宮頸がん検診で あなたの未来 守りたい



まだ20代だから…まだ若いから…
と思っているそのあなた！
今20代で子宮頸がんを発症している人が増えています
他人事だと思わないでください



この子宮頸がん検診に行ってきたんだ。

子宮頸がんは、性交渉によるHPV（ヒトパピローマウイルス）感染が原因です。ありふれた感染で、その一部ががんになります。つまり、誰もがなる危険があるのです。

何？それ、私には関係ないよ。

そうなんだー

じゃあ、子宮頸がんになったらどうなっちゃうの？

早期発見の場合、多くは完治し、妊娠や出産も可能です。進行すると子宮切除など大きな手術が必要になり、妊娠・出産は困難となります。だからこそ、がんを早期発見する「検診」が必要です。

そういえば私、以前ワクチン打ってるから大丈夫じゃないの？

ワクチンは効果がありますが、ウイルスの感染を100%予防してくれるものではありません。だからこそ検診が必要なのです。

沼津市役所健康づくり保健師鈴木保長さんより

今、若い女性に子宮頸がんが増えている状況です。10年後も素敵な女性として輝き続けるために今できることはなんでしょうか？
子宮頸がん検診はがんになる前の状態で異常を発見することができる精度の高い検診です。将来の妊娠・出産のためにこれを機に、「子宮頸がん検診」を受けてみませんか？

検診って具体的に何をやるの？

子宮頸がん検診では主に内診、細胞診という方法で検査が行われます。

内診

- 1 異常がないか、目で見て確認します。
- 2 産道という宮層の管をいれて、産道の内部や子宮の入り口に異常がないか観察します。
- 3 産道の内部で産道の上から両方の手で探るようになり、子宮の大きさや動き、腫れがないか確認します。

細胞診

- 1 産道から専用の器具を挿入します。
- 2 子宮の入り口を線棒のような器具で優しくこすり細胞を採取します。

検診って時間かかかるの？

ほぼ痛みもなく、約3分で終わる簡単な検査です。


検診って恥ずかしくないの？

男性の医師によって行われることもあります。検診者に医師の隣はカーテンで仕切られていて、恥ずかしさは少なくなっています。

検診車は、入り口には厚いカーテンがあり、外から中が見えない仕組みです。中はカーテンで仕切られており、検診を待つ人と、受けている人が顔を合わせることはないようなシステムでプライバシーが守られています。

検診はどこで受けられるの？

検診は様々な病院で行われる個別検診、保健センターで行われる集団検診に分かれます。集団検診では検診車の中で実施されています。



子宮頸がん検診を受けた人に聞いてみました

Q1 検診のきっかけは何ですか？

Aさん：無料クーポンが送られてきていて、無料なら行くかなと思いました。学校の先生からも性行為がある人は絶対に行くよう言われていて、万が一病気を持っていたら怖いという思いもあったので行くことにしました。

Bさん：無料だから行ってきなさいと医療従事者である親に勧められたことがきっかけです。1人で行くのは怖かったため親に付き添ってもらいました。

Q2 実際に受けた感想をさかせてください。

Aさん：一瞬で終わったのでびっくりしました。一瞬すぎてほとんど覚えていないくらいに。

Bさん：痛いかなと不安な気持ちもありましたが実際そのようなことはなく、不安が顔に出たせいかなと丁寧に説明をした上で検診を行ってくれました。

Q3 検診後の変化はいかがですか？

Aさん：異常じゃないと分かって安心した気持ちで過ごしています。

Bさん：検診を受けることに対する不安は軽減しました。また、続けて検診を受けようという気持ちになりました。

Q4 受けていない方々へメッセージをお願いします。

Aさん：せっかく無料で行けるのだから行っておくべきだと思います。日本の学校は性教育をしっかりと行っていないところも多いので、自分の身体に興味を持って知る事が大切だと思います。

Bさん：検診に行くことを面倒に感じてしまうかもしれませんが、無料のクーポンもありますし、検診も短時間で終わるので、自分の身体のためにも1度検診に行ってみてはどうでしょうか。

制作：聖隷クリストファー大学看護学部 2018がん看護ゼミナール、沼津市役所健康づくり課
イラスト・デザイン：F3（エフスリー）デザイン
※本資料作成においては、ふじのくに地域・大学コンソーシアムの助成を受けています。

図 1. 最終的に作成した子宮頸がん検診啓発用パンフレット